



TITLE:

新優生学をいかに理解すべきか  
ーデザイナー・ベビー議論におけ  
る「危害」からの検討ー(  
Abstract\_要旨)

AUTHOR(S):

赤塚, 京子

---

CITATION:

赤塚, 京子. 新優生学をいかに理解すべきか ーデザイナー・ベビー議論  
における「危害」からの検討ー. 京都大学, 2017, 博士(人間・環境学)

ISSUE DATE:

2017-03-23

URL:

<https://doi.org/10.14989/doctor.k20461>

RIGHT:

学位規則第9条第2項により要約公開; 許諾条件により要約は2017-09-01に公開

京都大学	博士（人間・環境学）	氏名	赤塚 京子
論文題目	新優生学をいかに理解すべきか —デザイナー・ベビー議論における「危害」からの検討—		
<p>（論文内容の要旨）</p> <p>現在、「デザイナー・ベビー」の技術が確立され、その応用が新優生学者に勧められているが、自由主義的価値観を基盤とする新優生学者でさえも、他者に危害を加えてはならないという原則を認めている。本論文は、そのような新優生学者が、他者危害原則をどこまで理解し、どこまで応用しようとしているか、という学術的分析によって、新優生学の一側面を批評するものである。</p> <p>本論文は、当該問題をめぐって賛否両論ある新優生学を評価する際の新たな視点を提示している。研究手順としては、英米圏の生命倫理学分野におけるデザイナー・ベビーに関する議論を取り上げ、新優生学が前提としている（或いは黙殺している）「危害」に着目して分析と考察を行っている。本論文は5章と結論から構成されている。</p> <p>第1章では、本論文の背景として、デザイナー・ベビーに関連する今日の生殖技術や遺伝子操作などを紹介し、新優生学の歴史的背景やデザイナー・ベビーの倫理的問題を概観している。</p> <p>第2章では、自由・自律の問題を扱っている。新優生学は、子孫の遺伝形質に介入する親の自由を容認しているが、それによる子どもの自由や自律の侵害は「危害」と見なされている。また、子どもの自由や自律を保護するために、「開かれた未来への権利」に危害を加えない操作に限定すべきである、と新優生学者達は述べている。それに対して、本論文では、この権利の保障が行き過ぎた遺伝的介入から子どもを守ることになるのかどうかを検討している。考察の結果、「開かれた未来への権利」を保障できたとしても、子どもの自由や自律の侵害を回避できない事態が生じ得ることを明らかに示している。</p> <p>第3章では、差別と偏見の問題を扱っている。なぜならば、遺伝的介入によって、障害のある子ども（またはマイノリティ）を産まないと選択する者が増えれば、既に障害を持つ者の存在を否定したり、差別や偏見の助長に繋がったりするという恐れがあるからである。新優生学は、親が敢えて遺伝的介入をしない選択、障害ある子どもの出生を回避しない選択の自由を抑圧したりすることが新たな「危害」と成ることが考察を通じて明らかになった。</p> <p>差別や偏見に繋がるという障害者側の主張に対して、新優生学者は選択や嗜好の違いに起因するものであると反論しており、そもそも障害者やマイノリティが被る「危害」を軽視していることが第3章で示唆されている。</p>			

第4章は、格差や不平等の問題を扱っている。具体的には、遺伝子操作や「望ましい」特性を持った胚の選択を目的とした着床前診断が実用化された場合、技術へのアクセスを巡る格差や不平等が生じるという問題を指摘している。

本章の考察の結果、新優生学は、技術への平等なアクセスが保障されないことを理由に、利益を選択する機会が奪われることを「自由の制約」と見なし、それを「危害」と捉えている。しかし、仮に新優生学が強調する平等な機会の分配が担保されたとしても、価値観の多様性が損なわれる結果、個人の選択の自由が阻害されるという「危害」が生じることが示唆されている。

第5章では、遺伝的多様性の問題を扱っている。特に子どもへの遺伝的介入によって、「望ましい」とされる子孫の内実が均質化して、遺伝子プールの多様性が喪失する問題を検討している。

新優生学では、人類の利益のために子どもに敢えて障害や疾患のある遺伝子を残すことが「危害」とされる。ただし、本章の考察を通して、このような「危害」を回避するために、遺伝子プールの多様性を一切考慮しないでいることが明らかになっている。その結果、新優生学が黙殺する「危害」として、アクセスの不平等による遺伝的格差の拡大、及び将来世代のアイデンティティの侵害があることを指摘している。

結論では、これまでの検討を通じて明らかになった、新優生学が考慮している「危害」と、視野に入れていない「危害」の整理とともに、考慮している「危害」に潜む別次元の「危害」の存在にも言及している。新優生学は現世代の親やその子どものみを「危害」の中心的な対象として考慮しているのに対して、同時代の社会構成員のみならず、将来の子どもはそこから除外されている点も言及している。

「新優生学をいかに理解すべきか」という問いに対して、本論文は新優生学的実践を許容し得る範囲について論じた。具体的には、着床前診断に関しては説得的に反論できないとしても、胚への遺伝子操作に関しては、生命の存続を脅かす重篤な疾患の治療目的以外の利用は禁止すべきであると結論づけている。

展望として、本論文は主に哲学・倫理的議論の検討を行ってきたが、今後、特定の社会・文化的文脈を視野に入れる必要を指摘している。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は英米圏の生命倫理学者が展開しているデザイナー・ベビー議論の分析と批評を試みている。親の自己決定を基に「望ましい」遺伝的特徴を備えた子どもの出産を推奨する新優生学者が、無自覚に前提としている他者危害原則の射程を明らかに示している文献研究である。

これまで、旧優生学は広く研究されてきた一方、新優生学の前提に関する研究は蓄積が浅く、デザイナー・ベビーからの分析は皆無に等しい。近年、新たな生殖技術が優生学に繋がるとの指摘はあるが、踏み込んだ議論は少ない。殊に日本では、新優生学の論理や思想について検討した研究はごく僅かである。本論文は、現実味を帯びつつあるデザイナー・ベビーの倫理的問題を扱い、今後議論すべき視座を明示している点で、学術的意義を高く評価できる。具体的には、本論文の評価すべき点は、以下の3点に集約される。

①本論文の独創性は、危害の視点からデザイナー・ベビーの倫理的議論を深めていることにある。一見すると「他者危害原則」が守られる限り、新優生学的な実践が危害を与えないように思われる。それに対して申請者が、新優生学側が前提とする危害原則の適用範囲を探り、既存の指摘に終わらない独創的な着眼を行った点は評価に値する。

②特筆すべき点は、各章の考察結果を踏まえ、結論部で新優生学の問題を指摘している点である。申請者は、新優生学者達が考慮している「危害」と、彼らが本来検討すべき「危害」を明確に指摘している。また、新優生学の論者が考慮する「危害」の中でも、その危害は想定されている以上に深刻であり、回避不可能なものであることが説得的に論じられている。特に平等なアクセスを保障できないという指摘などは、評価されるべき点である。新優生学が他者危害原則の「他者」とする対象に、論理的一貫性がない、という重大な問題を指摘した点も、本論文の功績として高く評価できる。

③本論文は、文献研究を通して得られた考察と結論を基に、どのような新優生学的実践が許容できるか、という問いに対する回答を試みている。学問的知見を現代社会の課題に対して応用しようとする試みは、本研究科の理念に適うものとして評価されるべきであろう。

上記の通り、これまで主題的なテーマとして扱われることが少なかった新優生学の議論を進展させることに成功しており、その学術的成果は大き

いと言えよう。尚、その成果を出すために、長期に亘って膨大な英語文献を真摯に読解し、分析と考察を進めた申請者の粘り強い姿勢も評価したい。

ただし、本論文は、新優生学が懸念する「危害」同士が衝突する場合に、どのような「危害」を優先すべきか、という点に関して議論する余地が確かに残っている。或いは特定の文化や社会、宗教などの背景を考慮できていないという問題点も指摘できる。しかしこれらの限界を課題として認識し、今後、上記の点の考察を進めてゆけば、新優生学が自明視している「危害」をより深く理解することができるであろう。以上のような課題は残されているが、これらは本論文の評価を大きく損なうものではない。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成29年1月6日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は京都大学学位規定第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。

要旨公表可能日：年 月 日以降